

古墳文化が花開くまで⑥

土や石などを積み上げて築かれた高塚の形が、丸いものを『円墳』、四角いものを『方墳』、四角と丸が組み合わさって、柄鏡形・鍵穴形をしたものを『前方後円墳』というように現在では分類されている古墳。それは真上からみた形であるが、空中写真などと違って、古墳が造られた当時はその丸さや四角さを目で捉えることはできなかつただろう。にもかかわらず古墳は、まるで空から見下ろすことができたかのように整った形をしていて、古墳造りが設計・測量・土木などの技術を伴った事業であったことが伝わってくる。古墳が造られたのは3世紀中頃～7世紀初め頃(約1750～1400年前)で、東北から九州にかけて16万基以上のものが造られた。その約350年間で、『古墳時代』といわれている。

古墳時代は、それ以前の弥生時代のムラから発展したクニに比べ、より広域な政治組織を形作っていった時代と考えられている。そのことを示すのが古墳の存在である。古墳造



前方後円墳の分布図

りには膨大な労働力が必要であるので、古墳の存在から相当の政治力や経済力を握った地域を束ねる首長がいたことが想定される。古墳の中で最も注目されるのが、いろいろある種類のうちの頂点に立つ存在とされる『前方後円墳』である。各地の前方後円墳の形や規格がほぼ一定であることから、首長たちの間には政治的な同盟または連合関係があったことが窺える。前方後円墳が畿内地方で出現していることや墳丘長が

200m以上の巨大古墳の大半が畿内地方に集中していることは、畿内の勢力が日本列島各地へ政治的影響力を及ぼす広域ネットワークの中心であったことを示している。広域ネットワークの中心となったその勢力が『ヤマト王権』である。前方後円墳が分布しているところはヤマト王権を中心とした広域ネットワークの中の特別な存在であったといえる。

すでに弥生時代には構築されていた海上交易ルートの存在に注目してみよう。志布志湾沿岸部では、弥生時代の遺跡から大隅半島～日向灘沿岸(豊後水道～瀬戸内というルートの交流を示す遺物が多く出土している。古墳時代になって、ヤマト王権が南九州と結びつくために、当然ながらこのルートを利用したことは言うまでもない。

鹿児島県内で前方後円墳の存在が確認されているのは、ここ志布志湾沿岸部である。その中で最古級の古墳と考えられているのは、肝付町の塚崎古墳群(前方後円墳5基、円墳38基など)で、築造は4世紀前半～中頃までさかのぼるといわれる。また志布志市の飯盛山古墳(墳丘長の約80mの前方後円墳)は4世紀後半～5世紀前半の築造とされる。志布志湾沿岸部は肝属川をはじめとする大小複数の河川によって形成された平野が広がっているが、多くは砂丘・泥湿地帯のため、必ずしも経済基盤を支える農耕文化が栄えていたとは限らない。そのような大隅の地が、畿内地方において古墳が出現してからそれほど時を経ずして、広域ネットワークに組みこまれたのはなぜだろうか？

ところがもう一つの問題がある。ヤマト王権はこの大隅の首長に何を求めてつながりを持つようとしたのだろうか？大隅の首長はヤマト王権にとってどんな役割を果たしていたのか？11月1日のシンポジウムではこういったテーマについて考え、横瀬古墳に眠る王の実像に迫ることにする。



横瀬古墳の上空写真